

生ける神に仕えるダニエル(2)

2009.1.27(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 1章1節から21節

ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレム
に来て、これを包囲した。主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に
渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の
神の宝物倉に納めた。王は宦官の長アシュベナズに命じて、イスラエル人の中から、王
族が貴族を数人選んで連れて来させた。その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は
美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわし
い者であり、また、カルデア人の文学とことばとを教えるにふさわしい者であった。王
は、王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当て、三年間、
彼らを養育することにし、そのあとで彼らが王に仕えるようにした。彼らのうちには、
ユダ部族のダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。宦官の長は彼らにほ
かの名をつけ、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデラク、ミシャエ
ルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。ダニエルは、王の食べる
ごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせて
くれ、と宦官の長に願った。神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与え
られた。宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物とを定め
た王さまを恐れている。もし王さまが、あなたがたの顔に、あなたがたと同年輩の
少年より元気がないのを見たなら、王さまはきっと私を罰するだろう。」そこで、ダ
ニエルは、宦官の長がダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤのために任命した
世話役に言った。「どうか十日間、しもべたちをためしてください。私たちに野菜を与
えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。そのようにして、私たちの顔色と、王
さまの食べるごちそうを食べている少年たちの顔色とを見比べて、あなたの見るとこ
ろに従ってこのしもべたちを扱ってください。」世話役は彼らのこの申し出を聞き入
れて、十日間、彼らをためしてみた。十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べ
るごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。そこで世話役は、
彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼ら
に野菜を与えることにした。神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力
と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。彼らを召
し入れるために王が命じておいた日数の終わりになって、宦官の長は彼らをネブカデ
ネザルの前に連れて来た。王が彼らと話してみると、みなのうちでだれもダニエル、
ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はなかった。そこで彼らは王に仕えること

になった。王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。ダニエルはクロス王の元年までそこにいた。

先週始めたテーマについて、今日も続けたいと思います。即ち「ダニエル」について、考えたいと思います。ダニエルは、いったいどのような男だったのでしょうか。異邦人である王は言ったのです。

ダニエル書 6章 20節後半

「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神...。」

ダニエルは、生ける神を信じただけではなく、たまに生ける神に仕えたのでもなく、いつも仕えていた人でした。そしてダニエル書を通してはっきり分かることは、彼は、どのような状況に置かれていても主に仕えた男でした。主のために生きたいと切に望んでいた男でした。どのような状況に置かれているときでも、私たちは主に仕えることができるのでしょうか。ダニエルのように獅子の穴にいるとき、悪魔が勝利を握っているかのように思われるときこそ主をよりよく知ることになるということが、主の導きの目的です。

ダニエルの一番の特徴は、祈りだったでしょう。主の呼びかけは、「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を超えた大いなる事を、あなたに告げよう」です。これこそ、エレミヤに与えられた約束でしたが、ダニエルも、このエレミヤに与えられた約束をもちろん知っていただけでなく、自分のものにしました。

ダニエルはどのような人だったか。その答えは、「祈りの人」でした。生けるまことの神は自分の祈りに応えてくださるということ、彼は何回も何回も経験しました。ですから、自分の身に危険を及ぼすことになる計画を聞いたとき、彼は心配しないですべてを主にゆだねることができたのです。

同じように、ペテロもこのような態度をとるべきであると思い、当時の迫害されていた兄弟姉妹に書き送ったのです。

ペテロの手紙・第一 5章 7節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配して下さるからです。

もし生けるまことの神が心配して下さるならば、自分で心配することはありませんし、心配することはおかしいのではないのでしょうか。ダニエルは、思いわずらいをすべて主にゆだねました。ダニエルを妬む人々はダニエルが主に祈ることを知っていましたので、王以外のものを拜んではならないという、ずるい法律を作ったわけです。ダニエルが主の御前に祈っているところ（即ち、彼らの作った法律を破っているところ）を、彼らは見つけました。ダニエルという男は、隠れた信者でいるよりは死んだほうがましだと思ったのです。何があっても妥協しません。ダニエルは全く恐れを持っていませんでした。それは、「主

を恐れた」からです。身の危険を覚えて、自分の高い地位を捨てて逃げようと思ったなら、それもできたはずです。窓を全部閉めて押入れの中で、誰も見ていないところで、声を出さずに心の中で祈ろうと思えばできたのです。そうすれば、捕えられなかったし、問題にならなかつたでしょう。けれどダニエルは、その態度をとると主は喜ばれないと思ったので、そのようにしなかつたのです。

彼は獅子のような性格の持ち主だと言っても良いかもしれませんが。獅子よりも勇気を持っていました。窓を開け放して、両手を挙げてエルサレムに向かって祈るのは、彼の習慣でした。毎日毎日そうしたのです。そうしないと主は喜ぶことがおできにならないし、お働きになることもできないし、ご自分の大いなるみわざを明らかになさることもできないと分かつたからです。大胆に窓を開け放して祈るといふことは、ダニエルが一時的な衝動にかられた、「から元気」でしたことではなかつたのです。彼はそのとき少なくとも70何歳かだつたのです。救われたばかりの青年ではなかつたのです。ですから、よく考えた、成熟し切つた者の判断でした。

共にバビロンに囚われていた同胞にとっては、何という素晴らしい証しだつたことでしょう。ダニエルは、公に祈り、公に証しし、人の誉れを少しも望まなかつたのです。結局、主を恐れたからです。今の全世界の状況はちょうど逆です。主を恐れる畏れがありません。オバマの最近言っていることは、子どもは墮落しても良い、と。いったいどういふことなのでしょう。戦争をしてはいけなけれど子どもは殺しても良い、とは。同じことではないですか。大変な速さで今の世界はおかしくなつていきます。意味は、「主は近い」。私たちは大いに喜びましょう。

ダニエルのとつた態度を通して、私たちは何を学ぶことができ、何を汲み取ることができのでしょうか。ダニエルは、若いときから自分を主にゆだねたのです。私は主のものです。私は主のために生きたい。彼は心からそう思つたのです。どうしてかと言いますと、主を体験的に知るようになったからです。主は生きておられる、祈りを聞いてくださると分かつたからです。若いときから主に仕えていたのが、ダニエルでした。どうして主に仕えたかと言いますと、「主を恐れた」からです。ダニエルにとってそれは決して簡単ではなかつたのです。環境は異邦の国でした。イスラエルから連れて来られ、異邦の教育を受けなくてはならなかつたし、文化も全部異邦のものでした。けれどまことの神を恐れる恐れは、ダニエルに異邦のものと妥協することを避ける勇気と力を与えました。主を恐れる恐れから、彼は主のことばを破ることを恐れたのです。聖書は、みことばは「神のことば」だと彼は確信していました。一つ一つのことばは主の靈感によって書かれています。それを認め、また従順に従うなら、大いに祝福されます。主に対する全き服従には素晴らしい豊かな恵みが伴います。

ダニエル書 1 章 15 節をもう一度お読みいたします。

ダニエル書 1 章 15 節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

と書かれています。これこそ祝福だったのです。多くの人は、目的のためには手段を選ばず、目的に到達できれば少しくらい妥協しても、方法は何でもどうでも良いではないか、と考えています。ダニエルはそのようなことをしませんでした。その結果がどうであろうと、主を恐れる恐れを持ち続けることこそ大切だ、と彼は確信したのです。もちろん、私たちは結果を見る必要はありません。日々主の御声を聞き、それに従って行くことだけが大切です。結果がどうであろうと、たとえ悪くても主が責任をとってくださるはずですよ。

ダニエルは、絶えず主にだけ従いました。ですから結果を少しも恐れなかったのです。私たちが主に頼ると、主に仕えようと、確かにいろいろな面白くないことが次々に出てきますが、主にゆだねることができまので、必ず、主は恵んでくださるに違いありません。

このダニエルのとった態度を通して何を教えられるかと言いますと、いのちをかけてすべてをささげる、また仕えていく価値のある主は、ダニエルの主であられるだけでなく、私たちの主でもあられます。ダニエルはそうのように深く心から主をあがめていましたので、主を裏切るよりは獅子の穴に投げ込まれるほうがましだと思います。これからみても、主は自分のいのちをささげても惜しくない尊いお方だと思って、信じて仕えていたダニエルの心が良く分かります。彼の願いは、絶えず主との交わりを持ち、一つになっていることでした。私たちがとっても、主はいのちをささげても悔いのないほど価値あるお方となっているのでしょうか。

主を知るようになった兄弟姉妹は、次のように証します。「私たちが罪人であったとき、主はまず私たちを愛してくださいました。大いなる恵みにより私たちの罪を赦されました。主は私たちを絶望の穴から、堅い岩の上に救い出してくださいました。しもべとなられ、私たちを救われた主は、私たちが地上で生きるわずかの間もあらゆる試みから守ってくださると約束しておられます。私たちも、この主のために、残るわずかのときを常に生けるまことの神に仕えていきたいと思ひます」と。

イエス様は私たちにとってどのような価値があるのでしょうか。ホセア書の中に次のようなことが書き記されています。

ホセア書 5章 12節

「わたしは、エフライムには、しみのように、ユダの家には、腐れのようになる。」

主は、イスラエルの民に言わざるを得なかったのです。

イエス様が私たちのいのちとなっているかどうか問題です。私たちはダニエルのようにひたすら主を愛し、主に仕えようと思っているのでしょうか。或いは、私たちは自分の名誉や立場を考え、妥協してうまく通り抜けようとするのでしょうか。それとも、ひたすら主にだけ仕えようとしているのでしょうか。もし主の御名のゆえに苦しみに会うなら、それを喜びとするのでしょうか。主に絶えず仕えることは私たちの喜びであり、そのことを心から言い表わすのを主は待っておられます。

ダニエルの神は、ダニエルを獅子の穴から救い得る神であるということが分かります。
ダニエル書 6章19節、20節

王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

ダニエルの神はこんにちでもなお私たちを獅子の穴から救うことができるのか、と疑っている人も或いはいるかもしれません。目に見える獅子は私たちをあまり襲わないでしょう。けれど、目に見えない悪魔は、吼えただけの獅子のように私たちを取り巻き、襲ってきます。ダニエルと一緒に寝た獅子は、張子の獅子ではありませんでした。生きている猛獣でした。私たちを取り巻く悪魔の攻撃、試み、戦いは、架空のものではありません。恐ろしい現実です。もし主が私たちを守ってくださらなかったなら、ダニエルは獅子に裂かれて死んでしまったでしょう。同じように主が私たちを守ってくださらなければ、私たちは恐るべき悪霊の攻撃に遭い、絶望し、間違った方向に導かれていくことでしょう。

ダビデの体験はどうだったでしょうか。詩篇57篇を読むと、彼は次のように告白しています。一つの証しでもあります。

詩篇 57篇4節

私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になっています。彼らの歯は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です。

7節

神よ。私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません。私は歌い、ほめ歌を歌いましょう。

ダビデ王は憎しみのただ中、むさぼり食う獅子の中に身を横たえました。けれどついに7節のように、勝利の叫びをあげることができました。あなたにとって、あなたの家族は獅子の穴のようかもしれません。あなたは家にいると、イエス様の御名のゆえに一致と平和がなく、居にくいかもしれません。どうしてでしょうか。イエス様の答えは、マタイ伝10章に書かれています。

マタイの福音書 10章34節から39節

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っただけではありません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、

わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしします。

主を第一にすると損をしません。

職場は獅子の穴のようかもしれません。ダニエルのように妥協せず、常に職場にあって主^{しゅ}に仕えていくな^ら、本^{ほん}当^{とう}に幸^{さい}い^わです。もし悪^{あく}魔^まがこ^{この}のダニエル書^{しよ} 6 章^{しょう} 2 4 節^{せつ}のよう^にあなたにさ^さや^やい^いて来^きたらどう答^{こた}え^えま^まし^しょう。即^{すな}ち、「あ^あなたがいつも仕^{つか}えてい^いる神^{かみ}は獅子^{しし}の穴^{あな}から救^{すく}うこと^{こと}がで^できる^か」と。次^{つぎ}のよう^にに答^{こた}え^える^{べき}です。「はい。主^{しゅ}はで^でき^ます。主^{しゅ}は救^{すく}うこと^{こと}がお^おでき^きになる^{だけ}で^でなく^く、救^{すく}いたい^いの^のです。た^たと^とえ、主^{しゅ}は私^{わたくし}を獅子^{しし}の穴^{あな}から救^{すく}い出^だされ^なく^{ても}、栄^{えい}光^{こう}の体^{からだ}に引^ひき上^あげ^てく^ださ^います」と。

もう少し、周りの、ほかの獅子の穴について考えましょうか。

その一つは、ヘブル書に次のように書かれています。かつての、主を第一にした人々の経験についての箇所です。

ヘブル人への手紙 1 1 章 3 3 節から 3 9 節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

そうであったとしても、妥協せず、主を第一にしてみことばにだけに頼ったのです。

今読みました箇所を見ても、今まで主の御名のゆえに殺された多くの人々について書かれています。彼らの経験したことは、まさに獅子の穴そのものでした。彼らは拷問の苦しみに甘んじ、少しの妥協もせず、常に主^{しゅ}に仕^{つか}えてき^きました。これら^{これら}の人^{ひと}々に、前^{まえ}に読^よみま^ましたダニエル書^{しよ} 6 章^{しょう} 2 0 節^{せつ}を尋^{たず}ねると何^{なん}と答^{こた}え^える^でし^しょうか。彼^{かれ}らは喜^{よろこ}んでローマ書^{しよ} 8 章^{しょう} 3 7 節^{せつ}のよう^にに言^いう^に違^{ちが}い^あり^あり^ません。即^{すな}ち、

ローマ人への手紙 8 章 3 7 節

しかし、私^{わたくし}たちは、私^{わたくし}たちを愛^{あい}してくださ^{かた}った方^{かた}によって、これらすべてのこと

なか
の中にあっても、^{あつとうてき}圧倒的な^{しょうりしゃ}勝利者となるのです。

^{びょうき}病気も、^{ひと}一つの^{しし}獅子の^{あな}穴ではないでしょうか。^{おお}多くの^{しゅ}主にある^{きょうだいしまい}兄弟姉妹は、^{やまい}病になり、^{すうしゅうかん}数週間、^{すうかげつ}数箇月、^{すうねんかん}数年間と^{ゆか}床の上に^{うえ}寝た^ねきりで、^よ良くなる^{のぞ}望みのない^{とうびょうせいかつ}闘病生活^{つづ}を続けてい
ます。これらの^{ひとびと}人々は、この^よ世の^{のぞ}望みは^{けっきょくに}結局^{やく}何も^た役に^{ひとびと}立たないのです。そのような^{ほんとう}人々は
本当に^{こどく}さびしくて^{しゅ}孤独ですが、^{きょうだいしまい}主はそれらの^{よろこ}兄弟姉妹の^よ喜びであり、また^よ抛りどころとな
っておられます。これらの^{きょうだいしまい}兄弟姉妹に、^{しょ}ダニエル^{しょう}書^{せつ}6章^{たず}20節^{なん}を^{こた}尋ねると、^{なん}何と^{こた}答えるの
でしょう。彼らは^{かれ}必ず^{かなら}ダビデのように^{こた}答えるでしょう。詩篇^{しへん}103篇^{べん}1節^{せつ}から^{せつ}のように。
詩篇 103篇1節から5節

^{しゅ}わが^{わたくし}たましいよ。主を^{みな}ほめた^{しゅ}たえよ。私^{しゅ}の^ようちにある^{しゅ}すべての^よものよ。聖なる^{しゅ}御名
を^{しゅ}ほめた^{しゅ}たえよ。わが^{しゅ}たましいよ。主を^{しゅ}ほめた^{しゅ}たえよ。主の^よ良くして^{しゅ}くださった^{しゅ}こと
を^な何一つ^な忘れる^なな。主は、^{しゅ}あなたの^よすべての^{やまい}咎を^{やまい}赦し、^{やまい}あなたの^{やまい}すべての^{やまい}病を^{やまい}いやし、
^{あな}あなたの^{あな}いのちを^{あな}穴から^{あな}贖い、^{あな}あなたに、^{めく}恵みと^{かんむり}あわれみとの^{かんむり}冠^{かんむり}をかぶらせ、^{あな}あな
たの^{いっしょう}一生を^よ良い^みもので^{わか}満たされる。あなたの^{あたら}若さは、^{あたら}わしのように、^{あたら}新しくなる。

^{ひと}もう一つの^{あな}穴があります。死^しという^{しし}獅子の^{あな}穴です。何と^{なん}多くの^{おお}主を^{しゅ}信じる^{しん}者が^{もの}既に^{すて}この^{あな}穴
を^{とお}通って^い行った^しこと^しでしょう。死^しを^し克服^{さま}された^しイエス様^しを知る^{かれ}ようになり、^し彼らが^し死ぬ^{すんぜん}寸前
に、^{わたくし}私^{わたくし}たちが^{まくら}その^た枕辺^{こころ}に^{たず}立って^{なん}その^{こた}心を^{かなら}尋ねるなら、^{かなら}何と^{かなら}答える^{かなら}の^{かなら}でしょう。必ず、^{かなら}コ
リント^{たいいち}第一^{てがみ}の手紙^{しょう}15章^{せつ}54節^{こた}のみ^{こた}ことば^{こた}をもって^{こた}答える^{こた}でしょう。
コリント人への手紙・第一 15章54節後半から57節

^し「死は^{しょうり}勝利に^しのまれた。」^しとしる^{じつげん}されている、^しみことば^しが^し実現^しします。「死よ。おま
えの^{しょうり}勝利^しはどこにある^しのか。死よ。おまえの^しとげ^しはどこにある^しのか。」^し死^しのとげ^しは^し罪^{つみ}で
あり、^{つみ}罪^{つみ}の^{ちから}力は^{りっぽう}律法^{かみ}です。しかし、^{かみ}神^{かんしゃ}に^{かみ}感謝^{かみ}すべき^{かみ}です。神は、^{わたくし}私^{しゅ}たちの^{しゅ}主^{しゅ}イエス・
キリスト^{わたくし}によって、^{わたくし}私^{しょうり}たちに^{あた}勝利^{あた}を与えて^{あた}くださいました。

^{わたくし}私の^しひいおば^{へや}あさんが^ま死ぬ^{くら}とき、^しその^し部屋^{すんぜん}は^し真^し暗^{すんぜん}でした。けれど^し死ぬ^{すんぜん}寸前^{すんぜん}、^しひいおば
^{かお}あさんの^ま顔^まは^ひ真^{あか}昼^{あか}の^{しゅ}日^{しゅ}の^{えいこう}ように^み明る^いくなり、^し主^しの^し栄光^しを見る、^{わたくし}と^{わたくし}言^{わたくし}って^{わたくし}死^{わたくし}に^{わたくし}ま^{わたくし}した。^{わたくし}私^{わたくし}の
^は母^はは^{すば}その^し素^し晴^しらしい^し死^しの^み情^み景^みを見て、^{さま}イエス^{しん}様^{しん}を^{さま}信^{しん}じる^{しん}ようになり^{しん}ました。

^{おお}多くの^{ひと}人々は^いスイスの^{かみがっこう}ベアテンベルク^{こうちよう}に行^{かみがっこう}きました。この^{こうちよう}ベアテンベルク^{こうちよう}神^{かみがっこう}学校^{こうちよう}の^{こうちよう}校^{かみがっこう}長^{こうちよう}
^{せんせい}先生^{せんせい}が^め召^めされるときも、^{すば}素^{しゅ}晴^{しゅ}らしい^{しゅ}情^{しゅ}景^{しゅ}で^{しゅ}した。召^めされるとき、^{わたくし}「私^{しゅ}は^{しゅ}主^{こえ}の^き声^きを^き聞^きく^きこ
^{しゅ}ができる。主^{しゅ}が^{しゅ}見^{しゅ}える。罪^{つみ}の^い赦^いしは^い栄^い光^いの^い冠^いだ」と^い言^いって、^い息^{いき}を^い引^いき^い取^いられ^いました。や^いが
^{さま}て^{さま}イエス^こ様^こが^こ来^こられるとき、^{みな}御^{みな}名^{みな}の^こゆえ^こに^こ殺^こされた^こすべての^こ人^こ々、^{ひと}病^{ひと}で^{やまい}死^しんだ^し兄^し弟^し姉^し妹^し、
^{はくがい}迫害^{はくがい}されて^し死^{しん}んだ^{しん}信^{しん}じる^{しん}者^{しん}は^{しん}みな、^{しし}獅子^{あな}の^あ穴^あから^あ引^あき^あ上^あげられ、^{よみがえ}甦^{よみがえ}らせられ、^{しゅ}主^{しゅ}のみ^{しゅ}も^{しゅ}と^{しゅ}で
^{おお}大^{おお}いに^{よるこ}喜^{よるこ}ぶ^{よるこ}ようになり^{よるこ}ます。

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

同じ内容の記事は、いわゆる空中再臨の箇所です。

テサロニケ人への手紙・第一 4章 13節から18節

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

「眠った人々」、先に死んだ人のことです。

ダニエルのように、常に主にだけ仕えたいと望む者は豊かに祝福されます。ダニエルの特徴は、幼子のような信仰、定まった心、目の前に一つのはっきりとした目標を持っていたことです。少しの妥協をすることもせず、ダニエルの証しは素晴らしい影響を周囲に及ぼしたでしょう。異邦人の王でさえも告白したのです。「ダニエルの神」と言って、結局主をほめたたえました。王は自らダニエルの神を知りたいという餓え渴きを持ったばかりではありません。全国に、全世界に命令を書き送って、ダニエルの神を恐れるように命令したのです。簡単な提案ではなく、はっきりとした命令でした。

ダニエル書 6章 25節から27節

そのとき、ダリヨス王は、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに次のように書き送った。「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

ダニエルを妬んで迫害した人々はみな、穴に投げ入れられるようになりました。その人

たちだけではなく、妻も子も嘔み裂かれて死んだ、と聖書に書かれています。

もし、今日私たちが主に新しくすべてをささげ、特に私たちの意志を主にささげて仕えるなら、私たちの家族も、周囲の人々も、主のみ救いにあずかるようになるに違いありません。ですから、心から主にだけ仕える者になりましょう。

了